

関野雄先生収集遺物の紹介

考古学研究室では、平成16年5月に、故関野雄先生が生前に収集された考古遺物や蔵書を御遺族の方から譲り受けました。現在それらを整理して目録を作成しているところですが、この機会に、新しく考古学研究室が寄贈を受けました考古遺物について簡単に紹介したいと思います。

関野雄先生は、古代中国の華北地域を中心として、都城址の調査・研究、半瓦当を中心とした瓦当の研究、貨幣と度量衡や鉄器文化に関する研究など、中国考古学の各種研究分野で多大な業績をあげられました。

先生は1939年東京大学帝国大学文学部東洋史学科卒業後、その年の4月から1941年4月まで北京に留学され、主として華北方面の遺跡と遺物の考古学的調査や研究に従事されました。この度、研究室が寄贈を受けた考古資料も、北京留学時代の先生がフィールド調査の際に入手された考古遺物がその大半を占めています。中でも山東省臨淄の齊故城址出土品や、曲阜の靈光殿址出土品が多く、その一部は先生の著書である『半瓦当の研究』（岩波書店 1952年）や『中國考古學研究』（東京大学出版会 1956年）に、当時の踏査記録とともに紹介されています。

寄贈を受けた遺物のうち、先生が臨淄を踏査された際に採集・購入された齊故城址出土品と考えられるものは、90点余りの半瓦当、30点余りの有文磚の破片、100点余りの陶文資料、44点の封泥、前漢鏡の土製鋳型や半兩錢の石製鋳型、銅鏃21点・小形帶鉤2点・銅錢39点などの金属製品、そして子安貝やそれを模した製品が67点あります。

半瓦当は有文のものと無文のものがありますが、前者は樹木文を主たる文様モチーフとしている戦国時代齊国の都城の建物に用いられた瓦当です。『半瓦当の研究』において齊の有文半瓦当の分類が行われていますが、今回の寄贈資料はその標識資料の大半を網羅しています。優品が集められており、この紀要の表紙に拓本を掲載したのもその一つです。また、軒丸瓦の製作方法を研究するうえでも良好な資料が少なくありません。燕などの半瓦当と比較しますと、瓦当の文様のみならず、軒丸瓦の製作技法においても特徴的な点が観察できます。

土器は、齊の陶文の採集を目的として収集されたもので、豆の脚柱部や壺の口頸部の破片等が主となっております。

銅鏃は三角錐式が2点ありますが、二翼式で茎まで青銅で作られたものが主体となっております、『中國考古學研究』の第35図で紹介されている通り3タイプに分けることができます。

銅錢には齊刀はみられません。『中國考古學研究』第34図に掲載されているような特異な加工の施された刀錢のほか、半兩錢、五銖錢、貨泉、小泉直一、大泉五十などがあります。

子安貝やそれを模した製品（肉厚の貝殻製と獣骨製）は『中國考古學研究』図版第8等に記載されている通りのもので、関野雄先生は貨幣というよりは装飾品ではないかと述べています。

臨淄の齊城は、漢代に入っても山東の要地として機能していたようで、多くの封泥のほか、前漢鏡や半兩錢の鑄型などの重要な遺物が存在します。漢式瓦については、『中國考古學研究』第29図に紹介されていますが、寄贈資料の中には臨淄出土と考えられるものはほとんど見当たりませんでした。

封泥は欠損の少ないものが集められておりまして、その一部の拓本が『中國考古學研究』第37図に紹介されています。

鏡の鑄型は『中國考古學研究』図版第8に紹介されている通りの方格草葉文鏡の土製鑄型で、軽くてきめの細かい胎土で作られています。堅緻なものではありませんが、遺物としての遺存状況は良好です。

半兩錢の鑄型は四銖半兩錢の鑄造に用いられた滑石製の鑄型です。四角い鑄型の一つのコーナー部付近の破片です。錢の型の彫りこみが6ヶ所と幹状の湯道となる溝が部分的に確認できます。

次に関野雄先生が曲阜を踏査された際に採集・購入された靈光殿址出土品と考えられる遺物について紹介していきます。これに該当するものは、四神文のものを含む漢代の円瓦当40点余りを中心として、各種塼や文様の施された土器片のほか、漢代より時代の下る蓮華文の円瓦当10点や、軒平瓦が4点あります。

漢式瓦については『中國考古學研究』図版第9、第10に掲載されているもののほか、『曲阜魯城の遺跡』（東京大学文学部考古学研究室 1951年）図版16-4に紹介されているものもあります。『曲阜魯城の遺跡』での靈光殿址の調査成果で明らかになった通り、靈光殿は前漢の景帝代に建てられますが、後漢頃になるとその直上数十cmの所に重複するような形で建替えが行われます。靈光殿址で採集された漢式瓦にもその建替えに関連する型式差が認められ、朱雀文や白虎文などの四神文円瓦当は新しい段階の宮殿に伴うものと考えられます。

塼はあまり採集されなかったようですが、『中國考古學研究』第62図にある完形に近い有文方形塼や玉砂利敷の効果を狙ったと考えられる突起のある塼2種（下層段階で用いられた、小形で頭の丸い方柱状形式と、上層段階で用いられた、方塼上面に丸い突起が複数つく形式）等があります。

これらの遺跡以外の遺物では、『半瓦当の研究』にも紹介されている燕の饗饗文半瓦当2点や出土地不明とされる「萬千」半瓦当、『中國考古學研究』第20図にあるような三翼式・三角錐式で鉄の茎をもつものが多い漢式の銅鏃21点（邯鄲の挿箭嶺において収集）等があります。また、出土地が明確ではありませんが、東周時代以降のものと考えられる青銅製の矛2点（内一つは袋部の内部に中子が遺存）、製陶に用いられる半球面状の土製当て具、といった興味深い遺物もあります。

以上、簡単な紹介ではありましたが、これらの重要遺物が中国考古学研究に広く活用されることを願い、資料整理や報告を進めて行きたいと思います。 （文責 森本幹彦）